１月１６日 金環日食報告（ニュージーランド）

大越　治

１月１６日（水）午前６時、激しい風雨の音で目が覚めた。ニュージーランドの首都ウエリントン。ここは日食の中心線上にありながら、ウインディ・ウエリントンと言われるほど風が強く、ニュージーランドでも最も天候の不安定な場所である。昨夜の天気予報通り、最悪の天気になってしまった。

正月明けの忙しい時期に、無理をして４日間の休暇を取った私は、義兄の住むこのウエリントンに、家内と二人だけの日食駆け足旅行に出かけた。７月の皆既食に隠れたこのマイナーな金環食に対して、正確な情報はほとんどなく、一部天文雑誌には間違った情報がそのまま載ったりもしていた。私は自分で遠征するつもりもあり、日食情報事務局としての仕事もあって、八方手を尽くして情報を入手しようとしたが、ついに時間切れになってしまったのである。

ただ、昨年末に義兄の紹介で、ニュージーランドのアマチュア天文家のビル・アレン氏とようやく連絡が取れ、１往復半の手紙のやり取りができた。アレン氏は、ウエリントンの対岸、南島のブレナムに住んでいて、そこはニュージーランドでも最も日照時間の多い地域のひとつだという。彼は私たちを自宅に招いてくれ、一緒に観測しようと誘ってくれた。私と家内はアレン氏の好意に甘えることにし、ベースはウエリントンの義兄の家、観測地はブレナムのアレン氏の家、と決めたのである。

１月１５日に、オークランド経由でウエリントン入りをした私たちは、例によって町を歩きながら情報収集を始めた。ところが、金環日食が明日見られるなどという気配はどこにもない。たいてい、日食の見られる都市の大きな書店などには「日食コーナー」ができ、ポスターやら「直接見ては目に悪いぞ！」などの注意書きがあるのに、ここには見事なほどなにもない。書店にある天文雑誌はアメリカのアストロノミー誌だけで、それにはなにも記事はない。ウエリントンにあるカーター天文台を尋ねたが、そこにも日食を案内する掲示物や観望会のお知らせはなかった。

日食の最大は昼前である。そこで、１６日朝の定期国内便でブレナムに飛び、その日の最終便でウエリントンに戻る計画を立てた。ウインディ・ウエリントンであるから、少々の風で飛行便が欠航することはない。しかし、霧が濃い場合には欠航の可能性もある。朝、目が覚めてすぐカーテンを開けると、激しい風雨ばかりか濃い霧も目に入ったのである。

それでも朝食をとり、７時半に家を出る頃には雨が小降りになっていた。空港まで義兄に送ってもらい、チェックインを済ませる。どうやら欠航にはならないらしく、一安心だ。しかし、小さな空港の待合室で二人でぼーっと待っていると、実に不安である。予定の時間になっ

ても、何の案内もないのだ。空港職員をつかまえて聞いても、ただ待てとしか言わない。予定を３０分も過ぎて、ようやく機内に乗り込むことができた。

１８人乗りの小型機である。乗客は９人だ。キャンデーを配り終わった副パイロットが席につくと、飛行機は３２分遅れで雨のウエリントン空港を飛び立った。車輪が滑走路を離れると、小さな飛行機はたちまちジェットコースターに変わった。雲の中を飛ぶ飛行機は、上下左右に激しく揺れる。それでも、地元のビジネス客らしい人は平気で新聞を読んでいる。私たち夫婦もこういうのは大好きで、外の景色が見えないのだけが不満だ。

１０分も飛ぶと周囲が明るくなって、晴れ間が出てきた。眼下に見えてきた南島は、日光をいっぱいに浴びて明るく輝いている。２０分強の飛行でブレナムに着陸。天気は積雲が多少あるが上々である。ウエリントンの天気とのコントラストが、不思議なくらいである。空港でタクシーを呼んでもらい、アレン氏の住所を見せて行ってもらう。料金は1.3ドル!であった。

アレン氏の家には、地元ニュージーランドやオーストラリアなど、２０名近いアマチュアがすでに到着、観測準備を始めていた。私と家内も一通りの挨拶を済ませると、庭のプールのまわりに展開している機材の間に場所をもらい、さっそく準備を始めた。

天気の方は全く心配ない状態だ。夏とはいっても気温はそう高くない。しかし、日差しはかなり強く、着ていた上着やトレーナーはすぐに無用となった。第一接触のすぐ後に準備完了。ビデオのインターバルタイマーを入れる。皆既と違い、金環日食は心の余裕がたっぷりであるとはいっても、準備ができるまでは気が気でない。

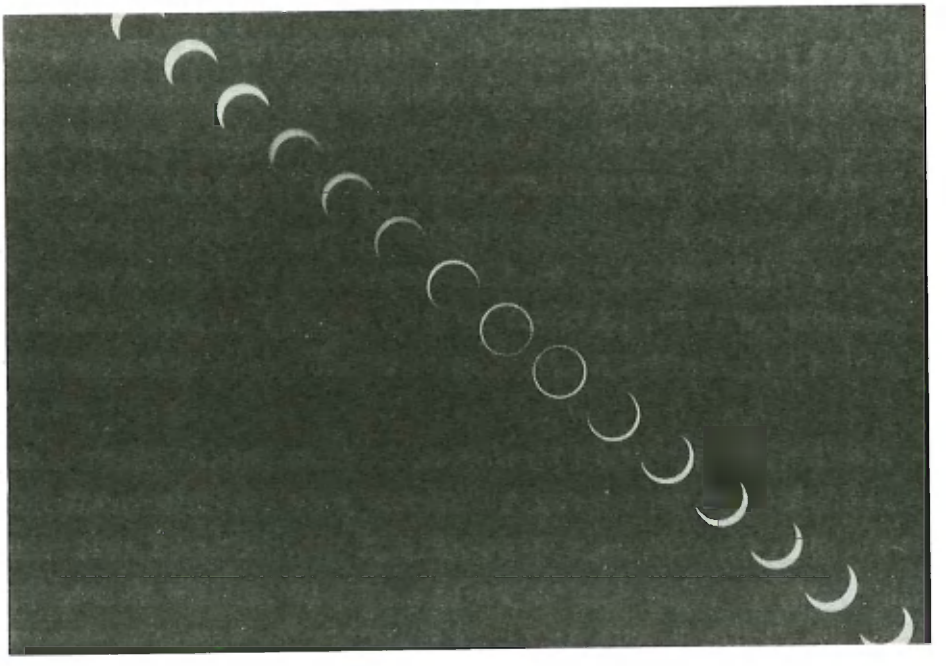
ほかの人達の機材を見て回ると、ミードやセレストロンのシュミットカセグレンや、クエスター、２０センチくらいの反射やうんと古い感じの細長ーい屈折機、自作機材など、実にバラエティーに富んでいる。ウエイトの補助にスニーカーなどがぶら下がっているのを見ると、嬉しくなってしまう。みんな互いに機材を見ながら、ああだこうだと言い合う。たいした英語でないのに通じてしまうのが不思議だ。

アレン夫人の手作りクッキーやレモネードをご馳走になりながら、欠けていく太陽を見守る。食最大に近づくにつれ、人や機材の影が薄ぼんやりしてくる。木漏れ日はみんな三日月になっている。極軸合わせが適当なので、ビデオもスチールも、しょっちゅう方向を修正しなければならないのがわずらわしい。

高度６３度で第二接触。ごく薄い絹雲がかかっているが、全く気にならない。継続時間が７分４０秒近くもあるのだ。余裕たっぷりである。沖縄の金環は「輪ゴム」のようだったが、今回は「イカリング」である。木漏れ日を写したり、双眼鏡を覗いたりしながら、「まだ輪っかだよ」などと言ってみたりする。そして第三接触。やはり拍手が起こった。

あとはもうおまけである。連続食分はカメラが自動的に写してくれる。サンドウイッチとコーヒーをご馳走になりながら、時々写野の修正をするだけだ。家内がスチールを撮り切り、ビデオのバッテリーが切れるまで観測を続けた。

機材を片付けた後、庭にある観測室を見せてもらう。自作の３０ｃｍカセグレン（ＳＴ４つき）に自作の光電管がついている。１２等くらいまで観測可能で、主に掩蔽や変光星の観測に使っているという。コンピューターによる画像処理や、ＰＣノート(！)を使っての近くの天文台とのパソコン通信、マックの天文ソフトなど、いろいろ見せてもらうことができた。

さらに、庭の果樹園を見せてもらったり、飼っている羊と遊ばせてもらううちに、いつの間にか雲が広がり、雨がぱらついてきた。室内では、私たちがお土産に持って行った天文カレンダーをさかなに話が弾み、また、スカテレのバックナンバーをはさんで、今までの日食観測の話をする。お互いに、どこかの観測地や空港ですれ違っていてもおかしくないような人達である。次回、彼らの多くはバハ・カリフォルニアに出かけるそうだ。

帰りはアレン氏の車で、ブレナムの町を案内してもらいがてら空港まで送ってもらい、その日の最終便でウエリントンに戻った。朝と違い、着陸したウエリントンは快晴で、その夜はすばらしい南天の星空が見られた。義兄の話では、ウエリントンでも切れ切れの雲の隙間から、かろうじて金環が見えたそうである。